

鶴の笛

林芙美子

青空文庫

昔、ききんのつづいた年がありました。その村には鶴が大変たくさんいました。鶴たちは毎日、たべものを探して歩きましたけれど、どこにもたべものがないので、気の早い鶴はみんな旅仕度をして遠くへ飛んでゆきました。

すると、足の悪い鶴と、そのお嫁さんだけが、その村へのこるこるになりました。足の悪い鶴は、みんなのいなくなつたさびしい沼地のふちの葦のしげつたところに立つてみんなが飛びたつて行つた空をみていました。

ある日、鶴のお嫁さんは水ぎわのなかを、一生懸命くちばしでたべものを探していました。小魚でも一ぴきぐらいないかしら、どじょうでもいい、もう、今朝はさすがにふらになつて一生懸命、あつちこつち探していました。朝陽がきらきら光つて広い空に浮雲が一つ西の方へゆるく流れてゆきます。若木の林のなかは、ところまだらに陽の光が煙つていて美しい景色でした。

すると、しばらくして、何ともいえない美しい笛の音色がきこえました。おや、何だろうと思いました。いままでおなかのすいていたお嫁さんの鶴は、ふっとおなかのくちくちなるような気がして、その美しい笛の音色をきいていました。

そおつと笛の音のする方へ歩いてゆきますと、足の悪い鶴が横笛を吹いていました。

「おやおや、あなたが笛を吹いていたのですか。」

お嫁さんの鶴がたずねました。

足の悪い鶴ははずかしそうにふりかえつて、

「さつきね、何かないかと思つて沼のなかを探していたのさ。そしたら、カチンと固いものがくちにさわつたので、あわててくわえたらこの笛だったのよ。何だろうと思つてね、いろんな風にくわえていたら、ふつと竹の小さい穴からきれいな音がしたのさ、もう、おなかのすいたのも忘れて、これを吹いていたのさ……。」

「まあ、そうでしたの、とてもきれいな音色でびっくりしました。何だか、昔のたのしいころのことがうかんで来て、とても気持ちがよくなりましたわ。」

笛の音色があまりきれいなので、おなかのすいた二羽の鶴はいままで食べることをばかり考えて、いつもよくよしていたことが馬鹿々々しくなりました。

自分たちを置いて勝手に飛んでいってしまったたくさんの鶴たちを恨んで、ふたりは毎日ぐちばかりいっていましたけれど、笛をひろつてからは、笛の音色があんまりきれいなので、二人はとぼしい食べものに満足して、お話しをすることは、たのしかったおもい出

話や、遠くに行つた鶴たちが幸福であればいいという話ばかりになりました。

「ねえ、わたしは、笛の音色をきいていると、こんなみじめな年ばかりじゃなく、いまに、とても豊年のつづくいい年も来るような希望が出来て、すこしもがっかりしなくなりまして。今日はすこし、ちよつと遠くまでお魚をさがして来ますから、時々、その笛を吹いて下さいね。」

お嫁さんの鶴がいました。

「ああいとも、けがをしないように行っておいで。」

お嫁さんの鶴はすぐ飛び立つて行きました。しばらくすると、小さい沼のところへ来ました。沼の上に時々水しぶきがしています。おや何だろうとねらいをつけて飛びおけると、いままで見たこともないたくさんの小魚が群をなしているところがありました。お嫁さんの鶴は胸がどきどきしてその魚をとりました。さつそく、おみやげをつくって笛の音色の方へ旅立ちますと、西の方から、子供の鶴を三羽もつれた夫婦の鶴にいました。

「おやまあ、随分久しぶりですね。どうしたんですか……。」

お嫁さんの鶴がたずねますと、

「ええひどいめにありましたよ。どこへ行つてもいいことはなく、とうとう、私の子供は

ふたりとも病気で死んでしまいました。どこか、いいところはないかと思って、方々さまよっているところへ、何ともいえないきれいな笛の音がするので、きつと、あの笛の鳴る方にはいいことがあるにちがいないと思つて、やつて来たのですよ。」

と申しました。

「まあ、そんなに笛の音が遠くまで聞こえるのでしょうか。あれは、足の悪いうちの主人が吹いているのですよ。」

お嫁さんの鶴の案内で飛んでゆきますと、自分たちのみすてた村だったのでびっくりしました。お嫁さんの鶴は、笛の音色を長いあいだきいていましたので、心のなかがひろびろとしていて、どんなに自分たちが困つていても、ほかのものにほどこしをするのは気持のいいものにおもうようになっていました。

さつそく、さつきとつてきた魚を夕食に出して、旅づかれのした、おなかのすいている鶴たちに食べさせてやりました。

足の悪い鶴も、お嫁さん鶴も、ほんの少したべたきりで、

「遠慮しないでおあがりなさい。たくさん食べて元氣を出して行って下さい。」

と、しきりにすすめましたので、鶴の親子は涙ぐんでしまいました。たったこの間まで

は、みんなたべものをかくしあって、自分たちのことばかり考えていた鶴たちは、よるとさわるとたべもののけんかで、なかではおたがいにだましたり、きずつけあったりして、血なまぐさいことばかりで、鶴たちは、食べものの事といっしょに精神的な心配で、今日はたのしいという日は一日だつてありませんでした。

みんな、がやがやと群をなして、弱いものをおびやかしては、少しのたべものもとりあげて強いものがいばつているのです。

鶴の子供たちも、自然に気持がすきんで、おとなの悪いところばかりまねるようになって、きたない言葉づかいで、けんかばかりしていたのです。あんまりききんがつづいたので、みんな村をすてて行ってしまいましたけれど、いまはかえつて、以前より平和になり、七羽の鶴は、どんなことがあつても、のぞみをすてないで、ここで元気に働いて暮しましよつと話しあいました。

鶴のお嫁さんの案内で、魚のたくさんあるところをみつけましたので、七羽の鶴はしつそな気持で、いつもたのしい食事をするこゝが出来ました。

ある夜、あんまり美しいお月夜で、金色の光が、こうこうとあたりをてらしていますので、足の悪い鶴は、また笛を吹きました。

三羽の子供の鶴はお月様へむかって、歌をうたいたくなりました。

「きれいなきれいなお月さまア。」

小さい鶴が歌いました。すると中の兄さんの鶴が、「生れた村がいちばんいい。」と歌いました。上の兄さんは、「きもちのいい夜だね。何を考えてもたのしいね。」と歌いました。

子供鶴のお母さんはのんびりとして、

「ほんとに、わたしたちはしあわせになったのね。お前たちがががつしなくなっただけでもかえって来てよかった。乙さんも甲さんもみんなかえって来てくれるのにぎやかになっ
っていいのね。」

と申しました。

鶴のお父さんは、一ぶくたばこを吸いながら、足の悪い鶴の笛の音にききとれていました。笛の音色はピヨロピヨロと涼し気な音色をたてています。

「あら、何だか、にぎやかな羽音がしますよ、誰かかえって来たのでしょうか。」

やがて、金色の空から、一羽二羽、三羽四羽、村をすてていった鶴たちが笛の音色にきそわられてもどって来ました。

「誰もいばらないで、みんなでわけあって食べあう気持ならばかえっていらっしやい。」
足の悪い鶴が申しました。

かえって来た鶴たちはよろこんで涙を流しました。

それからは、みんなで働きに行つて、みんな仲よくわけあって食べました。——にぎやかな美しい鶴の国はいまもどこかにあるのでしょうか……。

きれいなところがいつもいい、

まずしくてもこころはゆたか、

みんなでわけあって、

みんなで働いて、

いつもきれいなこころで、

みんな愛しあってゆきましよう。

鶴の笛は、いつもそういつてピヨロピヨロとやさしくなっていたのです。

青空文庫情報

底本：「林芙美子全集 第十五巻」文泉堂出版

1974（昭和52）年4月20日発行

入力：林 幸雄

校正：花田泰治郎

2005年6月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鶴の笛

林芙美子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>